

大学生における言葉と色のイメージに関する研究

0807005

江口 日香里

【目的】

たとえば、りんごは赤いといったように、事物あるいは概念と色の間には連想関係があり、また、抽象的な対象においても、何らかの色のイメージを持つことがある。

色を使った性格検査で代表的なものに「カラー・シンボリズム・テスト」が挙げられる。カラー・シンボリズム・テストを参考に色彩の連想がある程度、共通のイメージをもち、パーソナリティーに関係があることが研究されてきた。

金澤(2003)の調査では、カラー・シンボリズム・テストを参考に、言葉がどのような色を喚起させるかを明らかにしたが、カラー・シンボリズム・テストとは違う色彩を用いており、パーソナリティーとの関連が検討されていない。

そこで、本研究では金澤(2003)の調査を参考に、現在、大学生において刺激語がどのような色のイメージを連想するのかを明らかにすること、また、同時に Big Five 尺度を用いて色の連想がパーソナリティーに与える影響の程度を示すことを目的とする。

【方法】

2011年11月上旬から11月中旬に某私立大学の学生154名(男性42名、女性112名)を対象に質問紙調査を行った。

質問紙の構成はフェイスシート、15の刺激語に対して、それぞれの刺激語のイメージに一番当てはまると思う1色を回答させ、パーソナリティーの測定には、和田(1996)が作成した Big Five 尺度60項目を7件法で回答させた。

刺激語については、カラー・シンボリズム・テストの41語の刺激語から、金澤(2003)の調査を参考に15つの刺激語(恐怖・嫉妬・不安・興奮・怒り・羞恥・悲観・罪・幸福・歓喜・本能・人生・空想・愛・恋)を抽出した。色も同様に金澤(2003)の調査を参考に「赤・桃・肌・黄・橙・黄土・茶・焦茶・紫・青・水・緑・黄緑・白・灰・黒」の16色を採用した。

【結果と考察】

まず、刺激語がどのような色のイメージを連想するのかを調べるため、男性、女性、全体に分け、コレスポネンシ分析を行なった。

その結果、男性、女性関係なく共通のイメージ連想が見られたのは「恐怖」の黒、「不安」の灰、「興奮」の赤、「怒り」の赤、「悲観」の青、「罪」の黒、「幸福」の黄、「歓喜」の黄、「空想」の水、「恋」の桃である。これらの刺激語と色は類似性が高いことが明らかにされた。「嫉妬」、「羞恥」、「本能」において、共通した1色のイメージは見られなかった。なお、「愛」については2色の類似性がみられた。

本研究と金澤(2003)の調査を比較し、刺激語と色の連想はあまり変化が見られなかった。

しかし、女性において、「幸福」と「愛」の色の連想が変化した。その要因として、女性にとっての「幸福」や「愛」の概念が変化したことが考えられる。

次に、大多数の人の選び方からはずれている色を「脱逸色彩」とし、数値化した得点を「脱逸得点」とした。Big Five 尺度の5因子、外向性・情緒不安定性・開放性・誠実性・調和性の各得点において、脱逸得点の程度別に対応のない1要因の分散分析したところ、いずれも有意な差は見られなかった。本研究の目的である、色の連想がパーソナリティーに与える影響の程度を示すことはできなかった。

その要因として、脱逸得点が極めて高い被験者がいないこと、被験者の人数が少ないことが推測される。

今後は、被験者の人数を確保し、本来のカラー・シンボリズム・テストに近い1対1の実験を行ない、色彩が言葉に与える影響およびパーソナリティーとの関連をさらに検討していくことが挙げられる。

(指導教員 豊村 和真 教授)